★講演

これからの世界と日本の子ども（二）

矢島釣次

日本の経済

次に、教育の問題を含めて、もう少し経済の問題をお話しいたします。

日本の経済のやり方、考え方、特に女性の方の考え方が間違っている、と私は思います。物価が高くなって、生活が苦しくなる、ということは、田中さんのせいでも三木さんのせいでもないんです。石油、食糧、原材料、これらの平均対外依存度というのが九〇％であります。しかし、この平均値というものにはいろいろ数字のいたずらのようなものが出てきますのでご注意いただきたいと思います。それから第一次エネルギー――石油、石炭、天然ガス等――を日本は外国からどれ位入れているかといいますと八七％、西ドイツでは五六％、アメリカは八・七％、けたが違います。しかもこれらの物の値段は、世界の物価に深い関係があります。

一つはロイター指数、一九三一年を一〇〇として、世界の物価に最も影響を与えるであろうと考えられる一七の品目が選ばれているわけです。そしてこれは狂乱物価の前年一九七三年一月に大体七八〇という数字です。それが昨年の一月に一四一六、その後一四四〇、一四六二と上昇し一年間に世界の物価が約倍になったということです。すると、世界の食糧および原材料、石油、これを九割近く輸入している、そして世界の物価が一年間に約二倍の値上りをしているとなると、日本の物価が上がらざるを得ない、これは当然のことです。私の研究室で計算しました結果、昭和四十八年下期から四十九年の六月まで、大体狂乱物価の時にあたりますが、卸売り物価の上昇は三四％といわれていますが三六％上がりました。その内の五八％は海外要因で、われわれの守備範囲

外の問題であります。したがって私たちにできることは、残りの四二%の国内要因をミニマムに、最小限度に押えるということが、インフレに対処する問題になるわけです。ところが世の中の人、全部がいけないのです。〝政府の責任だ、企業が悪い、自由主義経済体制が悪い〟ということで、責任をすりかえてしまったのです。これでは、インフレ問題に対して、本当のことをいってないということです。

日本の経済はどうなっているのか、といいますと、今までは〝低価額体系〟といって、食糧も原材料も石油も、安い値段で好きなだけ買えました。そして、多くの人々が一生懸命働きました。日本にはあまりトップといわれる人はいません。ポップーポップコーンの略、フワーッとして頭の中はからっぽーは、会社の社長でも政治家でも、たくさんいます。しかし、皆がよく働いて経済がどんどん成長しました。GNPがどんどんよくなりました。ふつう英語で Gross National Products=国民総生産といいますが、私は以前草柳さんとの対談で、これはあまりのびすぎるといけない、だから別な読み方の意味になるといいました。〝グーンとノビればパーとなる〟という読み方です。(笑い)

ところが、現在の経済体制というものは、〝真価額体系〟になってきました。すると、四十九年の一月以来、物価は高くなる、食糧も原材料も石油も安い値段で好きなだけ入ってこない、そういう時代になってきました。だんだん、真価額体系に軌道修正を行うということです。昨年の四月から今年の三月までを考えて、本来もっと上がる消費者物価が平均一四・二%、卸売物価は世界一低い、西ドイツよりも低く落ちついたわけです。しかも、この落付きを見せたのは、田中さんがおもにやったことです。田中さんですらできたのです。今年の四月から来年の三月までを考えましても、消費者物価は一〇%～一一%ぐらいでおさまると思います。こうなりますと、インフレ問題というものを日本はほぼ克服できたのだ、と判断しなければいけないのです。しかも、このようにインフレをほぼ克服できたのは、世界中で西ドイツと日本だけです。政策がよかったのではなく、国民皆がよく頑張ったわけです。ですから、むしろこれからは、景気をよくして行く方向に行きませんと、アジアに経済協力をするだけの余ゆうがもてません。物価問題も大事ですが、景気をよくして行くことも大事なのです。そうすることによって、日本の、アジア、世界における、特に日米関係における状態を非常によくしていくことができるようになると思います。

日本の教育

そこで教育問題に戻りまして、私どもが教育ということを、どういう形で考えていったらいいのかということを申し上げます。

教育というものを正面からとりあげる方もありますが、私のように経済学または国際環境論をやっております者から考えますと〝これからはどんどん世界に眼を開いて行ってほしい〟ということが一つの問題点であります。日本は依然として鎖国であります。日本人の物の考え方というものは、したがって鎖国四〇〇年（鎖国時代プラス明治時代一〇〇年）なのです。これからの私たちは世界的な視野から日本を考えて行くという、そういう教育をしないと、日本はいつまでも日本のことだけしか考えない、世界にのびて行くだけの力を本来もちながら日本という狭いからの中にとじこもる、そういう不幸な状態におちいってしまうことになると思います。

それから、教育の問題の根源はどこにあるか、私の個人的な経験を通して考えたことですが、〝いたみを知る〟ということが〝教育〟だと思います。このごろは親が子どもを叱る時に、なぐるということがいいことだとはいいませんが、いたみを与えるということをしません。そこに実は教育の根本的な間違いがあると思います。私ごとですが私には三人娘がおります。そして二番目の娘は今年一番目の娘の学校を受けまして、見事におちました。それで二番目の娘は非常に自分なりに悩み、考えたわけです。そして今までの自分の勉強のやり方というものが甘えで、中途半端であったことに気がついたわけです。とすると、それは教育におけるいたみを、みずから知ったことだと思います。そして、みずからがみずからの手で、みずからの道を選択していくだけの力をそなえて行くことになると思います。ここにこそ教育がもっている非常に重要な問題点があると思います。

三番目に、何から何まで、幼児教育から小中の教育全部を、今の家庭は学校とか幼稚園におしつける、ここに問題点があると思います。家庭には家庭としての役割がある。個人がどういうふうに行動すべきかについて、幼児期は幼児期として中学は中学として、大人になりかけの時期はまたその時期として、それぞれの生き方、ルールというものがあると思います。それを家庭でしっかり教える、しつけるということ、制裁を加えるということもある場合は必要でしょう。そういうことが家庭教育です。学校教育というのは、学校内における集団のルールを守ること、が必要なことだと思います。たとえば小学校では、読み書き、そろばん、修身、これが中心になります。私は学校給食に反対です。自分の子どものお昼の食事を、母親がみずからの手でこしらえてやる、ということで学校でも子どもと家庭とのつながりができるという方

向に向けて行くことが必要だと思うのです。幼稚園ではみんなお弁当を持って行きますね。あれが小学校へ入るとたちきられて、お母さんは手がはぶけていい、子どもを送り出したらテレビの前にいるか、もう一回寝床に入るか（笑い）というような形では、家庭のしつけも何もできないと思います。

私は、十五年間学芸大学というところにつとめております。私の教え子の多くは学校の先生になります。その時に、信州の山から出てきた、ただでさえ武骨な男が一年生の受持ちになって給食をやっていました。なかなかうまくいかないわけです。こんなことをやるのなら子どもたちともっと接触して、魂と魂のふれ合い、対話を通じて先生が子どもの仲間になりきるか、子どもが先生の話を理解しようと努力する、そういう真剣な話し合いの場を作った方がどれほどプラスになるか、と思いました。もう一人の私の教え子が生徒をぶちました、ぶった行為はよくありません。しかし父兄が校長先生に訴えました。そして校長先生と担任と父兄と子どもとで話し合いがもたれました。校長先生はその先生に、両親に対して謝るようにいわれました。その先生は心の中にわだかまるものをもってはいましたが、素直に両親の前に手を使ったことを謝りました。その時なんです、重要なことがおこったのは……。子どもが反抗しました。〝先生のやったことは正しい、ぼくが悪かったんだ、悪いものが制裁をうけるのは多くの友だちとの生活では必要なんだ〟といったのです。私は、これが子どもから親が教えられ、世の中をまるくおさめていこうという、大人のゆがんだ生活の知恵をみじんに砕いた、子どもの抵抗だと思います。そして子どもがそこからいたみを感じて、教育を本当に考えるようになり、学校のよさをしみじみ感じとった。私の教え子である教師も涙を流して、学校の先生は労働者だとか、聖職者だとかいろいろいわれているが、そんな抽象論は無用だ、私たちは、生身の子どもたちを教えることができ、私たち自身も教えてもらえる、こういう幸福は、職業に労働者だとか聖職だとか概念づけをする意味はないのだといっておりました。そして私も、教育というものはどういう意味においてでもいたみを感じ、感じさせる、またはみずからがいたみを感じてそれを克服していくものだと思いました。

学校には学校の教育、家庭には家庭の、社会には社会の教育があるのです。学校は堂々と学校としてなすべきことをすればいいのです。たとえば、幼稚園で子どもは洋服をよごしてはいけない、そんなことで教育ができると私は思わない。子どもは泥遊びが好きなので、子どもが泥遊びを拒否するなら、これはよほど注

意が必要です。子どもは下等な動物だ、動物集団だなどと近ごろの教育評論家の方々がおっしゃる。それを鋳型にはめるところに教育があると。しんこ細工やあの細工ではないのです。無限に、わくなしに夢をひろげて行くのが子どもです。それを大人の知恵で、わくをはめたり手間をはぶこうとするので、泥遊びをしちゃいけないということになります。ニワトリの首をしめるとか、ネコの首をしめるとか、そういうことはいけないことでしつけの限界です。しかし、子どもの夢をのばす遊びのためには、先生や親が無限に協力し、そういう方向への眼をのばしてやるようにすることは、教育だと思います。そして子どもはみずからがまいたものを、みずからかりとっていくのが教育なのです。

ところが最近は、大人のような、こまっちゃくれた子どもができあがっていきます。ここに私は、教育というものに対するゆがみを感じます。家庭からの要求をいちいち聞いて幼稚園で読み書きを教える、それもけっこうですが、泥まみれになって心から笑って遊んでいる、のびのびとした青空のような心を育てることこそ必要です。この青空に汚点をつけるのが大人の作業なのです。

私の家の近所にも子どもがいます。そして虫をとるということが幼稚園でいわれたらしく、付近の森へとりに行きます。友だちより先に行かないととられてしまうというので、だんだん時間が早くなり、最近では四時ごろに家を出て行きます。それで私もその児童館のそばの森へ出て見ました。すると必ず幼稚園の先生が一人、子どもたちがくるころにはいるのです。この、〝見守っている姿〟が教育だと思います。そして、先をこされちゃならないという子どもの競争心、自然に接するという問題、全部がこれも教育だと思います。ですから学校は、あれもこれもと社会や家庭の教育までかついでやるというような考え方は捨てていただきたいと思うのです。それで学校で、絶対にやらなければならない教育はこれなんだ、子どものしつけをキチンとやる、子どもの夢を無限にのばしてやる、集団の中でルールを守れないものにどうして守らせてやるか、集団と共に喜んで行動できる前向きの子どもをこしらえて行く、そして健全な体をきたえてやる、これが学校教育だと思います。そのために先生方が、先に立って一番いやなことをやる、それが先生の役割だと思います。

私も大学で教べんをとっていますが、大学というところで果して教育が行われているかどうかは疑問です。しかし、幼児期の教育がいかに大切かということは、むしろ教育学者よりも、教育にたずさわらない外部の人からの声が非常に強いのです。私は年に一回、経済学の方の関係でアメリカに行きますが、アメリカの教育機関を幼稚園から大学まで全部見て回って感ずることがありま

す。どんな保育園、幼稚園、中学に行っても必ず国旗がありま
す。日本では、国家の祝祭日であっても国旗をあげる家はほとん
どありません。君が代の歌える子どももいない。国に生きていて
自分の祖国、国土を愛し育てる心がなければ、教育はなりたちま
せん。そのためには国の歌、国の旗を大切にすることも、幼児の
時代からの教育において必要なことなのです。それは右翼が日の
丸をかざすので、日の丸、国旗というと、あ、右翼というふうに
誤って判断されますが、実は違うのです。私はプロ野球が好きで
アメリカに行くと見に行きます。すると必ず開始前に国歌の吹奏
があって国旗があがります。日本では国際的なスポーツの試合の
時だけです。君が代を聞くのもこういう時だけです。しかし自民
党であれ共産党であれ、日本人である以上は、国旗、国歌を大事
にするのは当然なのです。

こういうことをまず感じるのですが、先生、ことに幼稚園、保
育所、小学校の先生方が生きがいを感じて、体をはってやってい
い仕事なのだということに、もっと誇りをもっていただきたい。
アメリカでも教育にたずさわるのは非常に女性が多いです。その
先生方と話し合いますと、家庭と両立させながらともかく私には
この道しかない、といわれる先生が非常に多いのです。でもしか
先生（これは永井文相が作った言葉で私は少なからず憤慨してお
りますが）ではなく、まさに、先生という仕事は、多くの他人の
一番大事な人生を決定する土台をこしらえる仕事なのです。その
仕事に悔いはないと思います。土台がしっかりしていなければど
んな高いビルも建ちません。皆さんは誇りをもって、自信をもっ
て全力投球をしていただくのが皆さんのお仕事だと思います。日
本の今後三十年四十年後の国をよくして行くもとは三木さんなど
の政治家に求めるのではなく、皆さま方に私どもが求めるべき問
題だと思います。今、教育をめぐる問題点はたくさんあります。
しかし私どもは〝日本の教育はだめだ〟といっているばかりでは
よくならないと思います。この一見暗やみの中に、私たち一人一
人が小さなローソクをともして行くことことが、三十年、四十年
後の日本を、キチンと基礎の固まった国家に作り上げていくもと
になると思います。暗やみをのろうよりも一本の小さなローソク
をともそうという気持ちで、明日の幼児教育に誇りをもってまい
進していただきたいと思います。と同時に、私は戦争中、日本を
追われ、戦争は負けると知りながら生活をするということが非常
に辛かった。しかしその時私の支えになった和歌があります。そ
れを次に申上げます。

この秋は雨か嵐か知らねども
きょうのつとめの田草とるなり

これは二宮尊徳翁の歌です。私は、お先まっくらで、雨が降り嵐が吹いて、毎日一生懸命つとめていることも、全部だめになってしまうかもしれない、何もやる気がしないという気持ちにとかくおちいり勝ちな昨今です。しかし、ふとよんだ二宮翁の本の中にこの歌がありました。よしんば雨や嵐にあって秋のとり入れがだめになってしまうかもしれない、しかしわれわれ人間は、一日一日、いっときいっときのつとめを完全につくしきるということ、そしてこの積み上げが必ず明日の基礎をきずいていくのだという考えをもたなければならないと感じたわけです。

そして最後にもう一つ、私どものまわりには大変厚い一見こえがたいような壁があります。それに真正面からぶつからなければいけないのです。挫折することもあるでしょう。泣いたりわめいたりして厚い壁を破って行くということ、これが本当の教育の年輪だと思います。根付け作業とはこういうことであって、これをうけた子どもたちは一人々々が年輪をきざみこまれ、先生方も先生としての年輪をきざむことになるのです。この方向によって将来がきまる。これこそ本当の教育なのです。年輪きざみこみという作業は戦いです。時には戦い利あらずして、一歩後退二歩後退ということもあるかもしれません。しかしそれをどのように前向きにうけとめて、次の前進にそなえるかということが大切なのです。そのためには三つのC、challenge 挑戦したものに与えられる数少ない chance そしてそこにあぐらをかかず次なる挑戦のために change する、この三Cが大切です。またこの三Cの実現のためには三つのVが必要です。これは vitality 年齢にかぎらず活力をもつということ、短期中期の vision をもつということ、これは dream と考えて下さってもけっこうです。教育者が夢をなくしたらだめなのです。それからもう一つ、冒険を恐れてはいけない、常に目をあちこちに配って八方美人になろうなどと思ってはいけない venture を恐れてはいけないのです。

そしてこれは誰でもない、私がするのです。三Cも三Vも、私がこれをもって実行するのです。現場で日々蓄積して行くのだということが日本の教育にとって非常に必要なことだと思います。皆さまの教育のあり方というのは立派に世界で通用いたします。こんないい国はないのです。それは有名人が偉いのではなく、多くの人々が一生懸命自分の職分をつとめているところに今日の日本があるのです。どうか、将来の基礎固めを自信をもってやって下さいますよう心から祈ってこの話を終ります。

（東京工業大学）

（一九七五・七・二四　日本幼稚園協会夏期講習会講演より）